

## 外来語名詞「タイプ」の助数詞への進出

田 中 佑

### 1. はじめに

日本語の助数詞（もしくは、類別詞）は、意味的に、次のように分類される<sup>1</sup>。

- (1) a. 個別類別詞：最小としての個体を個別化する類別詞  
人（り・ひと）、匹、本、枚、粒、台、丁、個、つ、など
- b. 集合類別詞：個体が集まったグループを最小単位とする類別詞  
対、足、束、輪、山、セット、グループ、列、チーム、など
- c. 計量類別詞：量を測る類別詞  
杯、匙、袋、切れ、抱え、包み、キロ、グラム、トン、など  
(水口志乃扶 2004:64)

田中佑（2016）では、現代日本語において外来語<sup>2</sup>が個別類別詞（＝(1a)）に進出していることを指摘した。本稿では、個別類別詞領域への外来語の進出の第二の事例として、「共通した属性（性質・形状など）を有するまとまり」の数を表現する際に用いられる「タイプ」を取り上げ<sup>3</sup>、その進出の様相を明らかにする<sup>4</sup>。

- (2) トックリセーターを着た聖子の上半身写真と別カットで撮ったヒット・ビットの製品写真を合成したポスターを主要な駅に四タイプ並べて貼ると、次々と盗まれた。 (城島明彦『ソニー燃ゆ』2001)
- (3) 色は春の新色が3タイプあります。 (朝日新聞 2004/5/1)

なお、本稿では「タイプライター」そのものや「タイプライター、キーボード等で文章を打つ」という動作を表す「タイプ」については扱わない。

外来語の個別類別詞領域への進出は、現在進行形の言語変化である可能性が高い。このような言語変化を扱うことは、①言語変化における用法の定着をど

のように捉えるべきかを考える際の事例となる，②日本語における新たな助数詞の新生という現象の事例の一つとして位置付けることができる，といった点で意義があると言える。

以下，2節で外来語「タイプ」に言及している先行研究の概観を行うとともに，本稿の課題を述べる．3節では，「タイプ」，および，先行研究で指摘されているその類義語が現代語において助数詞用法を確立させていると捉えることができるかを確認する．続く4節では，助数詞「-タイプ」の成立時期に関する調査結果を報告し，5節で助数詞「-タイプ」の成立・定着の要因について考察を行う．最後に6節で本稿をまとめるとともに，今後の課題を述べる．

## 2. 先行研究および本稿の課題

橋本和佳 (2010) は 1911 年～2005 年までの朝日新聞<sup>5</sup>，1932 年～2002 年までの読売新聞の社説<sup>6</sup>，および，1955 年～2009 年までの政府 4 演説<sup>7</sup>に見られる外来語の量的推移に関する調査を行っている．調査対象となっているのは，人名，地名，社名，組織名（＝固有名詞）と，具体的な数値に後接する助数詞（＝数量名詞）を除く語（＝「普通名詞」）である．橋本和佳 (2010: 271-356) より，各資料における「タイプ」の出現度数を以下に引用する．

表 1 朝日新聞社説における「タイプ」の出現度数

	全 度 数	各年代の出現度数										ジャンル			
												政 経			他
		10 年	20 年	30 年	40 年	50 年	60 年	70 年	80 年	90 年	00 年	国内	国際	経済	
タイプ	6							3	3			1			5

表 2 読売新聞社説における「タイプ」の出現度数

	全 度 数	各年の出現度数														
		32 年	37 年	42 年	47 年	52 年	57 年	62 年	67 年	72 年	77 年	82 年	87 年	92 年	97 年	02 年
タイプ	2											2				

表3 政府4演説における「タイプ」の出現度数

	全 度 数	各年代における出現度数						ジャンル				初 出 年
		50年	60年	70年	80年	90年	00年	施政	外交	財政	経済	
タ イ プ	1	1										2000 <sup>8</sup>

金愛蘭 (2011) は、1950年、60年、70年、80年、90年、2000年の『毎日新聞縮刷版』(1990年は『CD-毎日新聞'91データ集』を、2000年は『CD-毎日新聞2001年データ集』を使用)の毎月5日、25日(休刊日の場合は翌日分を使用)の計24日分の朝刊全紙面(東京地方版・大阪本社版の紙面は除く)を用いた通時的調査で得た外来語について、100万字あたりの出現度数(出現率)を算出し、さらに国立国語研究所(1987)に倣い、次の方法で各語の増減の傾向を割り出している。

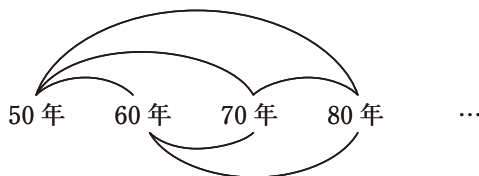


図1 金愛蘭 (2011:16) より

【図1】において弧で結ばれている2つの年について、新しい年の方が古い年よりも出現率が高ければ+1点、逆に新しい年の方が出現率が低ければ-1点とし、数値がプラスになるものを増加傾向にあると捉える<sup>9</sup>。

上記の方法で算出された「タイプ」の出現率と増加傾向係数を【表4】にまとめると。

表4 金愛蘭 (2011) の調査における「タイプ」の用例数など

	50年	60年	70年	80年	90年	00年
用例数	0	8	38	41	46	66
出現率	0	6.89	17.65	19.23	25.23	28.29

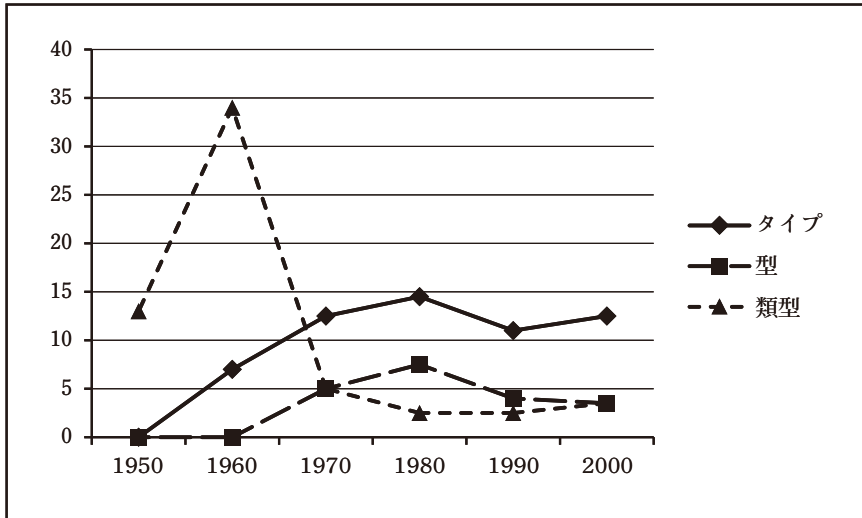
増加傾向係数：+15

「タイプ」の増加傾向係数は、最大の+15である。

加えて、金愛蘭（2011）は、外来語 36 語とそれぞれの類義語<sup>10</sup>の使用がどのように移り変わってきたのかについても調査を行い、各語とその類義語の 100 万字あたりの出現率の変動の在り方に基づき、36 語の外来語を「類義語を上回る外来語」「類義語に近づく外来語」「類義語に及ばない外来語」の 3 つに分けている。調査対象となった 36 語には「タイプ」も含まれており、【表 5】から「類義語を上回る外来語」に分類されている。

表 5 「タイプ」とその類義語の使用率の変動（金愛蘭 2011:40）

	50 年	60 年	70 年	80 年	91 年	00 年
タイプ	0	6.89	12.54	14.54	10.97	12.43
型	0	0	4.64	7.97	3.84	3.86
類型	13.19	33.58	5.11	2.81	2.74	3.43



金愛蘭（2011:45）は、「タイプ」「コメント」「テーマ」「イベント」「ドラマ」の 5 語について、「外来語が急増する前に、かなり優勢な類義語があることが特徴的である。これらにおいては、外来語が、それ以前に優勢だった類義語と交替し、それにとってかわっているようにみえる」と述べる。

なお、【表 4】と【表 5】では、「タイプ」の 100 万字あたりの出現率が異なっ

ている部分がある。類義語との使用傾向の変動（【表5】）に関する調査について、金愛蘭（2011:33）は、「この調査では、外来語および類義語が単独の自立語として使われた用例のみを対象とし、造語成分や数詞<sup>11</sup>として使われた場合は数えていない。したがって、増加傾向係数を算出した段階では多数の用例があった外来語でも、造語成分の用法しかなかったり、単独用法が少なかったりした場合は、調査の対象にならなかったものがある」と述べている。したがって、【表4】と【表5】の数値の差は、その年代に「タイプ」が造語成分、もしくは、助数詞として用いられた可能性を示すものとして捉えられる。

上記の先行研究による調査から、外来語「タイプ」は、遅くとも、1980年代には、新聞のような規範意識が働く媒体でも一定数使用される程度にまで定着していたと捉えることができる。しかし、橋本和佳（2010）、金愛蘭（2011）は、ともに助数詞としての「-タイプ」をカウントしておらず、助数詞用法（、もしくは、数詞との結合）がいつ頃から見られるものなのかについては明らかになっていない。

以上を踏まえ、次節以降では、近代から現代にかけての外来語「タイプ」の使用状況を再調査し、1）助数詞「-タイプ」はいつ頃から見られるのか、2）なぜ助数詞「-タイプ」は成立し得たのか、について考察を行っていく。

### 3. 助数詞認定基準と「タイプ」

通時的な調査の結果を示す前に、まず、外来語「タイプ」が現代語において助数詞用法を確立していると捉えられることを確認しておく。

当該要素が助数詞として認定できるか否かを判断する基準については、これまでにいくつかのテストが提示されている。代表的な2つの基準を以下に示す。

- (4) a. 数詞と結合して数量詞を成す  
b. 数を表現される名詞と共起し、かつ、副詞的位置に生起する  
(田中佑 2012, 2014)
- (5) 疑問数「何（なん）」を冠することができる (東条佳奈 2014)

(4) は統語論的・品詞論的観点を、(5) は意味的観点を重視したものであるが、現代語における「タイプ」はいずれの基準も満たす。

- (6) トックリセーターを着た聖子の上半身写真と別カットで撮ったヒット・ビットの製品写真を合成したポスターを主要な駅に四タイプ並べて貼ると、次々と盗まれた。

(城島明彦『ソニー燃ゆ』2001 (再掲= (2)))

- (7) 色は春の新色が3タイプあります。

(朝日新聞 2004/5/1 (再掲= (3)))

- (8) 「もっと思いきり食べたいの」「やけどする恋は嫌なの」など、ほかにも何タイプかあるそうです。

(朝日新聞 (夕刊) 2001/4/4)

- (9) 従来品と同様、取り付け車種を選ばない汎用品で、何タイプもの装着方法があることも特徴なのだ。

(『CARBOY』2002)

よって、外来語「タイプ」は現代語において助数詞用法を確立させていると捉えることができる。

一方、金愛蘭 (2011) で「タイプ」の類義語として挙げられている「型」「類型」について同様の観点から観察してみると、この2語は現代語において助数詞として機能するとは捉えられないことがわかる。

「型」は次のような形で数詞と結合することは可能である。

- (10) 搭載機は十三試艦爆を射出可能にした彗星二十二型を予定したが、完成後瑞雲に変更されたものの、実際に搭載されることはなかった。

(泉江三『日本の戦艦』2001)

しかし、(10)における「二十二型」は「彗星」の数量を表しておらず、このような場合、(11)に示すように、(4)を満たすことができず、また、「型」は(5)を満たすこともない(=(12))。

- (11) \*搭載機は十三試艦爆を射出可能にした彗星を二十二型予定したが、…

- (12) 搭載機は何型 (\*なんがた / なにがた) を予定していましたか？

影山太郎・眞野美穂・米澤優・當野能之 (2011:12) が「何 (なん)」が数を質問する意味になるなら、それは助数詞である。普通の名詞には「何 (なん)」は付かず、〈中略〉「何 (なん) 会社員」のように言えない。助数詞と普通の名詞の違いは、人数を数える「何人 (なんにん)」と国籍を尋ねる「何

人(なにじん)」、大学の数を尋ねる「何(なん)大学」と大学名を尋ねる「何(なに)大学」などの対比からも明らかだろう」と述べるように、「型」は数詞と結合可能ではあるが、数量詞を形成しているとは言えず、助数詞として機能していると捉えることもできない。

次に、「類型」について見る。「類型」も次に示すように数詞と結合することが可能であるが、「型」と同様、(4)を満たすことはできない。

- (13) 車道の右側通行や信号無視、酒酔い運転など 14 類型が「危険行為」と定められた。(朝日新聞 2015/10/15)
- (14) \* 車道の右側通行や信号無視、酒酔い運転などが 14 類型「危険行為」と定められた。

また、(5)についても、「何(なに)」と結合しているとは解釈できても、「何(なん)」と結合しているとは解釈することはできない<sup>12</sup>。

- (15) 一方、現在の水質の状況なのですけれども、ここの場合は、N/P比が20以下になっておりまして、窒素の方も対象と考えていきたいわけですが、窒素の方の水質が若干悪くて湖沼IV類型相当ということでございます。(中略)これまでのところが今回、何類型ということを決定させていただきたいという水域なのですけれども、15ページ以降にその他の湖沼について触れております。

(<http://www.env.go.jp/council/09water/y092-05a.html>)

以上より、外来語「タイプ」が現代語において助数詞用法を確立させていること、「タイプ」と意味的な共通性を有し、かつ、数詞との結合が可能であれば、他の形式も助数詞用法を確立させることができるとは捉えられないこと、の2点が指摘できる。

#### 4. 「タイプ」の助数詞用法の成立時期

本節では、田中佑(2016)で取り上げた8つの資料(【表6】参照)に関する調査から、外来語「タイプ」の助数詞用法の成立時期を推定する<sup>13</sup>。

【表6】に挙げた資料の調査において、本稿が対象とする「タイプ」である

と明確に判断されるもっとも古い用例は1909年のものであった<sup>14</sup>。

表6 使用コーパス・データベース一覧

	コーパス・データベース名	カバー範囲
近代語	『明六雑誌コーパス』	1874 (M7) ~ 1875 (M8)
	『国民之友コーパス』	1887 (M27) ~ 1888 (M28)
	『近代女性雑誌コーパス』	1894 (M28) ~ 1925 (T14)
	『太陽コーパス』	1895 (M28) ~ 1925 (T14)
	『神戸大学デジタル版新聞記事文庫』	1911 (M44) ~ 1945 (S20)
∫	『『国会会議録』パッケージ』	1947 (S22) ~ 2012 (H24)
現代語	『現代日本語書き言葉均衡コーパス』	1976 (S51) ~ 2005 (H17)
	『聞蔵Ⅱビジュアル』「朝日新聞(朝刊)」 <sup>15</sup>	1985 (S60) ~ 2014 (H26)

- (16) 日本中、各地方から色々なタイプの顔が集つて来る本郷神田の生活を思出すと、其れから関連して、牛肉屋の二階、蕎麥屋の裏座敷、つゞいて遊廓の景色までをも思出さざるを得なくなる。

(永井荷風「カルチエー、ラタンの一夜」『太陽』1909\_1号)

- (17) 何も悪人のタイプと云ふものが有るわけで無いが、どうも善人は色白で、悪人は色黒にしてある。

(著者不明「顔色と犯罪」『太陽』1909\_16号)

- (18) 惜むらくは文部一流の遣口の直轄にある學校なれば、詰め込むことに厳にして、むしろ人物養成といふ點に寛かなるが如き觀の致候。されば折角教育界に多少巾を利かしたまふ、あらはれたる數氏の技倆タイプがすべて團栗の丈比べとしか思はれず、諸雜誌にて折々うけたまはるお話しもどうも生煮えのお魚のやうなるは、甚だ物足らず感ぜられ候

(秋雨「東京だより」『女学世界』1909\_8号)

「タイプ」の数量を表す場合を、近代語では、数詞と直接結合させるのではなく、「-つ」を用いていたようで、数詞と結合した用例は1980年代になるまで見られない。(19)(20)に近代語において「-つ」と共起している「タイプ」の例を、(21)~(23)に数詞と結合した「タイプ」の例を示す。



- (19) 尚ほ他のタイプも見えますが、此の二つのタイプを具備して居るものと見て差支は無い。  
(東京日日新聞 1915/1/1-1915/1/16)
- (20) 今各國の死亡統計を比するに其の死亡に付四つのタイプあり  
(読売新聞 1916/5/17-1916/5/21)
- (21) 農村，大都市，準農村の三タイプの代表として，岩手，大阪，大分の三府県を選び，中学二，三年生と高校一，二年生の計五千百二十五人に，その学習，生活，進路意識などを八十～百項目について聞いた。  
(朝日新聞 1985/2/27)
- (22) 日産自動車は，小型乗用車「パルサー」など3車種に，若者と女性向けの仕様車 7タイプを新しく設定，20日から売り出した。  
(朝日新聞 1985/5/21)
- (23) 大手代理店には，特定の製紙メーカーとの資本関係がみられるものが多いが，これらを製紙メーカーとの結びつきの強さにより分類すると次の 3タイプに分類される。  
(公正取引委員会『公正取引委員会年次報告 独占禁止白書昭和61年版』1986)

次に，本調査における，上述した助数詞の認定基準 (4) (5) を満たす用例の初出例を挙げる。

- (24) 税制改革の焦点となってきており，国会審議の動きもみきわめながら，政府税調として，日本で番号制を導入する時の方法を 3-4タイプ列記したうえ，導入すべきかどうかの判断を国民に求めることになる  
とみられる。  
(朝日新聞 1988/10/15)
- (25) 「もっと思いきり食べたいの」「やけどする恋は嫌なの」など，ほかにも 何タイプかあるそうです。  
(朝日新聞 (夕刊) 2001/4/4 (=再掲(8)))

1960年代，1970年代の資料をさらに調査しなければならないが，助数詞「-タイプ」は，「タイプ」全体の使用量の増加 (1980年代) に少し遅れる形で1990年前後に成立したと捉えることができる<sup>16</sup>。

また，田中佑 (2016:86-87) では，外来語助数詞を論じる場合，当該の外

来語が助数詞体系に採り入れられるまでのプロセスを確認する必要があり、そのプロセスには、少なくとも、原語の助数詞用法が直接輸入されたというプロセスと、原語からは名詞として輸入されたのちに日本語の中で助数詞用法を派生させたというプロセスの2つが想定されることを述べた。前者の場合、「-メートル」「-グラム」などの単位を考えれば明らかであるが、言語接触や文化接触によって半ば強制的にその使用が要請されて定着に向かうのに対し、後者の場合は、外来語の輸入自体は、前者と同様に、言語接触・文化接触によるが、助数詞用法の成立・定着は日本語の内部で緩やかに進んだものと捉えられる。直接的な証拠を挙げるのは困難な部分があるが、名詞「タイプ」の使用と助数詞用法の成立までに時間差があることや、強制的に使用を要請される類のものではないことを加味すると、助数詞「-タイプ」の採用のプロセスは後者であると考えられる。

## 5. 助数詞「-タイプ」成立・定着の要因

本節では、助数詞「-タイプ」の成立要因と定着要因に関する考察を行う。

田中佑(2015)では、新たな助数詞の成立には社会的要因が大きく影響するという観点から、助数詞「-店」が産業革命による社会変化によって生じた助数詞の表現体系の歪みを覆うような形で成立・定着したと捉えられることを示した。しかし、「-タイプ」のように一般的意味を有し、どのような事物にも使用できる語の場合、社会の変化によって数を表現される事物の形状や性質が変化し、表現体系に歪みが生じたために新たな助数詞が必要になったというような分析することはできない。

一方、助数詞語彙体系に目を向けてみると、「-タイプ」と同様に「共通した属性(性質・形状など)を有するまとまり」の数を表現し、かつ、一般的意味を持つ語に「-種類」がある。実際、両者は、意味が完全に一致するわけではないが、置換可能である。

- (26) これまでの私の研究室でおこなってきたデザイン教育とデザインの現場をつなぐ { 3 タイプ / 3 種類 } の活動について述べてきた。

(三上訓顯・溝口正人・鈴木賢一『芸術工学への誘い』2001)

- (27) ホーネットは年代とともに Mk- I ~ Mk- III の { 3 タイプ / 3 種類 } に分けられる。

(いのうえ・こーいち『Mini』2002)

- (28) 韓国のタクシーには街を流している一般のタクシー、各ホテルが持っているホテル・タクシー、それに外国人旅行者用のコール・タクシーの {3種類/3タイプ} があります。

(洪淑子『楽しみながら覚える韓国語会話』1986)

- (29) 食道ガンは、食道をつくっているどの細胞がガン化したかによって、次の {2種類/2タイプ} に大別されます。

(金子隆一『ガン全種類別・最新治療法』2003)

また、「-種類」は近代語でも助数詞認定の基準である (4) (5) を満たす<sup>17</sup>。

- (30) 日本では假名が二種類あつて、平假名は民用假名で一般に用ゐられ片假名は官用假名とも云ふべきもので、政府の公文書でも電信でも片假名を用ゐて居る。  
(大阪毎日新聞 1919/8/25)

- (31) 例えば某處に何種類<sup>18</sup>かの事件を生じ其土地に於ける重立ちたる紳商輩が喚問もしくは留置せられたる事實ありとせんか之を目して社會の一大出來事と云はざるを得ず  
(時事新報 1913/9/8)

「-タイプ」と「-種類」がほぼ同じ意味を有し、かつ、助数詞体系内に「-種類」が先に存在していたならば、助数詞「-タイプ」が語彙体系にそもそも存在していた空き間を埋めるために成立したとは考えにくい。

以上を踏まえ、本稿では、助数詞「-タイプ」の成立と定着について次のように考える。

助数詞「-タイプ」の成立については、「新たな表現の案出」という言語変化一般に共通する萌芽的行為のみを想定する。一方、ほぼ同じ意味を持つ「-種類」がすでに存在するにもかかわらず、新たに創出された「-タイプ」が一定量使用されること、つまり、定着に向かう要因については、「-種類」にはないリスト用法の存在、および、冗長な表現の回避などによる既存の表現との棲み分けが考えられる。

言語体系の変化、その中でも特に、文法体系の変化に関しては、体系に空き間が存在することが変化、もしくは、新たな表現の創出の条件になるとされることが多い。しかし、外来語の流入による名詞の多様化などを考えると明らか

なように、語彙体系の変化の場合、既存の表現が存在している領域に新たな表現が創出される場合もある。

ここで、小柳智一（2013）が示す言語変化の3つの段階を引用する。

- (32) a. 案出：新しい言語表現の産出。ある個人がある時に1回行う。  
 b. 試行：新しい言語表現の拡散。複数の人が離散的に行う。  
 c. 採用：新しい言語表現の受容。ある集団内で人々が漸次的に行う。  
 （小柳智一 2013:16）

(32a) については「案出された言語表現は単に誤りとして無視される可能性もある（小柳智一 2013:17）」ものの、すでに表現が存在する領域で案出が起こらないということはない。したがって、助数詞「-タイプ」の成立の要因については、言語変化一般に共通する萌芽的行為である「新たな表現の案出」のみを想定しておけばよい。

ここで問題となるのが、助数詞「-タイプ」は、現在、言語変化のどの段階にあるのかという点であるが、小柳智一（2013:16-17）も述べているように、「案出があっても採用されるとは限らず、採用されなければ言語変化とは言えず、また、「試行は言語変化の萌芽であり、採用と連続的で厳密に区別できない」。そのため、言語変化の記述の際には、当該の言語変化がどの段階にあるかを認定するよりも、なぜ当該の言語表現が漸次的に行われる受容の次の段階に至れたのか、現在進行形の変化であれば定着に至れる可能性をどこに見出すかといった点が重要であると言える。

漸次的に行われる言語変化の次の段階に進むためには、一定量の使用がなされなくてはならない。そのためには、競合する既存の表現、「-タイプ」で言えば「-種類」とは違う意味を持つ、もしくは、異なる環境に生起できるなどといった棲み分けが重要となる。しかし、上述のとおり、両助数詞はほぼ同じ意味を有している。したがって、助数詞「-タイプ」の定着への過程については、意味的側面とは異なる観点からの説明を与える必要がある。

本稿では次のような点が、助数詞「-タイプ」の一定の使用量の確保に貢献し、延いては、表現の定着までの進行を支える要因になると考える。

まず、名詞「タイプ」には、名詞「種類」にはない以下のような用法が存在する。

- (33) タイプA：…  
 タイプB：…  
 タイプC：…

以上の3タイプは、形状による分類である。

- (34) \*種類A：…  
 種類B：…  
 種類C：…

以上の3種類は、形状による分類である。

ここでは、「タイプA」「タイプB」「タイプC」の部分を「リスト用法」と呼んでおくと、(33)(34)の対比で示したように、「種類」はリスト用法を持たない。また、分類をリストアップし、それを数量的にまとめ上げる場合、たとえば、(33)のように「タイプ」を用いてリストアップをしたら、「タイプ」を用いてそれをまとめることが自然なように思われる<sup>19</sup>。当然、(33)において、「3種類」でまとめ上げることも可能ではあるが、上述の使い方がより自然であるならば、このような用法の差異が助数詞「-タイプ」の使用の一定量の確保に貢献すると考えられる。

次に、助数詞「-タイプ」の用例を観察していると、新聞には次のようなものが比較的多く見られる。

- (35) 旧2級を年間300万ダース売っていたニッカウイスキーは、2種類8タイプで年間120万ダースの売り上げを目指す。

(朝日新聞 1989/7/12)

- (36) 東京ガスは、冷房を電気、暖房を都市ガスで行う高効率の冷暖房機「ガスルームエアコン」の新シリーズ 13機種24タイプを2月1日から首都圏で発売する。

(朝日新聞 1988/1/29)

- (37) 車種は4ドアセダンと3ドアハッチバックの 2車種10タイプ。

(朝日新聞 1986/10/21)

「-種類」「-機種」「-車種」を、便宜的に、「[-種類]類」と呼ぶ。上記の例では、いずれも「-種類」類が「-タイプ」に先行し、かつ、「-タイプ」の方がより細かな分類数を示しているが、(38)(39)に示すように、「-タイプ」が「-種類」類に先行し、大まかな分類数を提示することも可能である<sup>20</sup>。

- (38) それから次々と新薬が現れ、今では 5 タイプ約 20 種類ある。  
(朝日新聞 2007/11/30)
- (39) 屋外には福祉車両を実際に運転できる専用コースがあり、展示場には車いすのまま乗り降りできるものや、足を使わずに運転できるものなど 7 タイプ 10 車種の福祉車両がそろふ。  
(朝日新聞 2004/4/21)

「-タイプ」と「-種類」類以外が接続している場合、「-タイプ」は「-種類」と置換することが可能である (= (40) (41)) が、「-タイプ」と「-種類」類が接続している場合は意味をなさない (= (42)) か、冗長さを感じる表現となる (= (43))。

- (40) 20 畳のリビング、3 階の余暇室などを持つ高級住宅型、3 世代、4 世代同居型、店舗兼用など賃貸住宅型の { 3 タイプ / 3 種類 }、30 プラン。  
(朝日新聞 1987/11/17)
- (41) ペルー海軍が持つ { 3 タイプ / 3 種類 }、12 隻のうちで最も古い。  
(朝日新聞 1988/8/28)
- (42) 旧 2 級を年間 300 万ダース売っていたニッカウイスキーは、2 種類 { 8 タイプ / \*8 種類 } で年間 120 万ダースの売り上げを目指す。  
(朝日新聞 1989/7/12 (= (36)))
- (43) 屋外には福祉車両を実際に運転できる専用コースがあり、展示場には車いすのまま乗り降りできるものや、足を使わずに運転できるものなど { 7 タイプ / ?? 7 種類 } 10 車種の福祉車両がそろふ。  
(朝日新聞 2004/4/21 (= (40)))

このような表現は、情報の正確な伝達を意図する新聞のような媒体にのみよく用いられるものかもしれないが、「-タイプ」が途切れることなく継続的に使用される場になるのであれば、助数詞「-タイプ」の使用の維持に貢献するものとして位置付けることができる。

## 6. まとめと今後の課題

本稿では、個別類別詞領域への外来語の進出の第二の事例として、「共通した属性 (性質・形状など) を有するまとまり」の数を表現する際に用いられ

る「タイプ」を取り上げ、1) 助数詞「-タイプ」はいつ頃から見られるのか、2) なぜ助数詞「-タイプ」は成立し得たのか、について考察を行った。それぞれに対する本稿の主張をまとめると以下のようになる。

1) 助数詞「-タイプ」はいつ頃から見られるのか。

→ 助数詞「-タイプ」は、「タイプ」全体の使用量の増加（1980年代）に少し遅れる形で1990年前後に成立した。

2) なぜ助数詞「-タイプ」は成立し得たのか。

→ 助数詞「-タイプ」の成立については、「新たな表現の案出」という言語変化一般に共通する萌芽的行為のみを想定する。一方、ほぼ同じ意味を持つ「-種類」がすでに存在するにもかかわらず、新たに創出された「-タイプ」が一定量使用されること、つまり、定着に向かう要因については、「-種類」にはないリスト用法の存在、および、冗長な表現の回避などによる既存の表現との棲み分けが考えられる。

今後の課題であるが、1)と関連して、田中佑（2016）で取り上げた「-ケース」でも、助数詞用法の獲得は、当該の外来語名詞の使用が一般的になった後に起こっている。助数詞用法の獲得と名詞としての使用の一般化の関係については、さらに多くの語を調査し、考察を深めていく必要がある。

また、本稿で扱った助数詞「-タイプ」の成立が1990年前後と推測されるのに対し、田中佑（2016）で取り上げた助数詞「-ケース」の成立は2000年前後と推測される。これを個別類別詞領域への外来語の進出という現象の中に位置付けた場合、2つの外来語助数詞は同時期に発生したと捉えるべきか、それとも、散発的な現象と捉えるべきかについては、判断しかねる部分がある。この問題については、近代から現代にかけての助数詞語彙体系の変遷全体を視野に入れる必要があるが、こちらについても課題としたい。

上述の課題はいずれもさらに多くの助数詞について研究を進めていかなくても解決されないものであるため、今後も助数詞語彙体系全体を視野に入れながら、個々の要素についての分析を進めていきたい。

## 付記

本稿は、日本学術振興会科学研究費補助金 課題番号 16H06653「近現代日本語における助数詞の新生に関する語彙論的研究」（研究活動スタート支援、

平成 28 年度～平成 29 年度，研究代表者：田中佑）の助成を受けて行われた研究の成果の一部である。

### 注

- 1 影山太郎・眞野美穂・米澤優・當野能之（2011）は，水口志乃扶（2004）の（1c）「計量類別詞」を類別詞とはせず，「計量詞」とし，（1a）に対応する「単体類別詞」と（1b）に対応する「グループ類別詞」のみを類別詞としている。
- 2 本稿が用いる「外来語」という用語は，いわゆるカタカナ語を指すが，その中でも特に，幕末から明治初期にかけて増加した英語からの外来語を想定している。
- 3 「-タイプ」が「共通した属性（性質・形状など）を有するまとまり」の数を表現するというような述べ方をすると，集合類別詞に分類すべきなのではないかと思われるかもしれないが，集合類別詞は集合の要素が必ず2つ以上必要なのに対し，「-タイプ」は集合の要素が1つでも問題ないという違いがある。また，意味的にも，「-タイプ」は前提となる母集合を分類してできた個々の集合の内包（要素に共通する属性）を「1」として表現していると捉えられるため，やはり個別類別詞に属すると考えられる。
- 4 出典を記した用例は実例であり，用例への強調は引用者による。新聞の用例については，「新聞名・発行日」を，『日本語書き言葉均衡コーパス』などのコーパスから得た用例については「著者名・書誌名・（巻号）・発行年」を出典として記す。また，用例内で置換を行っている場合は，左を原典に統一する。
- 5 朝日新聞の調査は，1,140 日分（1911 年～2005 年までの 95 年間の毎年 12 日分），1,768 本の社説を対象に行われている。なお，調査対象の日付などの詳細は橋本和佳（2010:15-18）を参照されたい。
- 6 読売新聞の調査は，1932 年から 2002 年までの 70 年間を 5 年毎にサンプリングし，各年 12 日分，計 180 日の社説を対象としている。なお，詳細は橋本和佳（2010:159-160）を参照されたい。
- 7 政府 4 演説の調査は，1955 年～2009 年の 55 年間，計 216 本の演説を対象に行われている。なお，政府 4 演説は，「内閣総理大臣の「施政方針演説」，外務大臣の「外交演説」，財務大臣（2000 年までは大蔵大臣）の「財政演説」，経済財政政策担当大臣（2000 年までは経済企画庁長官）の「経済演説」（橋本和佳 2010:181）」を指す。データの詳細や資料的価値については橋本和佳（2010:181-186）を参照されたい。
- 8 各年代の出現度数は，たとえば，90 年代であれば 1991 年～2000 年のように集計されている。そのため，【表 3】では，初出年が 2000 年であるが，90 年代にカウントされている。詳細は橋本和佳（2010:346）を参照されたい。
- 9 増加傾向係数の算出方法については国立国語研究所（1987:66）も参照されたい。
- 10 金愛蘭（2011:33）は，36 語の選定について，増加傾向係数が+8 以上，かつ，『使い方の分かる類語例解辞典 新装版』に類義語が挙げられているもの，を基準としているが，主要な類義語が明らかに落ちている場合はそれを補っているとする。



- 11 数詞と助数詞から成る数量詞、もしくは、数詞と名詞で構成される数量表現を指すものと思われる。
- 12 実例は見られたものの、「類型」に「何(なに)」を冠して用いるのはあまり一般的ではないのかもしれない。実際、朝日新聞社が提供する『聞蔵Ⅱビジュアル』および『日本語書き言葉均衡コーパス』からは「何+類型」の用例は確認されなかった。
- 13 ジャンルやデータ量が統一されていないといった問題があるが、さらなる調査は今後の課題とする。
- 14 1895年に次のような用例が見られる。
- (i) 其の他坪内氏が「細君」の女主人公に於ける幸田氏が「一口劍」のお蘭に於ける乃至長谷川氏が「浮雲」の諸人物に於ける大抵皆な其の藍本ありて存することを疑はずデフホーのクルウソウに於ける亦た實に其の原型プロートタイプ有りしなり  
(森田思軒「亜歴セルカーク(上)」『太陽』1895\_5号)
- (ii) 明治十五年海に航して米國に遊び肖像寫影、不變色寫眞、乾板製造、アルパートタイプ、ヘリオタイプ、寫眞銅版術等の諸技をポストン、フィラデルフイヤなる寫眞術の名家に就き學び各々得る處あり、  
(著者不明「美術」『太陽』1895\_1号)
- (iii) 而して其の寫眞を廣く世に示す方法は、四五年前までは僅に石版に彫刻するのみなりしが、曾て製紙分社の星野錫氏、米國に渡りてアートのタイプ(寫眞版)の方法を傳へ來り、其後小川一眞氏、亦米國に渡りて寫眞銅版の法を傳ひ、尋いで猶興社の堀健吉氏も、亦寫眞銅版を米國に學びて歸朝し、此の小川氏等の寫眞銅版により、寫眞と活版と共に印版するを得るに至り、其の効用の上に最も長足の進歩を呈したり。  
(著者不明「工業」『太陽』1895\_1号)
- 上記3例は「タイプ」を含むものであるが、(i)は原語の“prototype”をそのままカタカナ表記したもので、(ii)(iii)は「前接要素+タイプ」とも、(i)に類するものとも解すことのできる例である。そのため、本稿では、外来語「タイプ」の初出とは考えないでおく。
- 15 伊藤由貴(2015)でも述べられているように、疑問数は資料によっては用いられ難い場合もあるため、「何タイプ」のみ『聞蔵Ⅱビジュアル』で検索できる他の資料(「朝日新聞(夕刊)」「朝日新聞デジタル」「アエラ」「週刊朝日」)についても追加調査を行った。
- 16 (4)を満たす用例の初出が1988年、(5)を満たす用例の初出が2001年であるが、これは新たな助数詞が生じる場合に、(4)の方が(5)よりも早く満たされるということを意味しない。東条佳奈(2014)は、現代語において名詞と同じ形態的サイズを有し、かつ、数詞と結合可能な語について調査を行い、(4)を満たす語群は(5)を満たす語群に包含される((4)を満たす語群C(5)を満たす語群)としている。そうであるならば、(5)の方が早く満たされる可能性があるが、この点については、2つの基準の関係性も含め、今後も議論を進めていかななくてはならない。
- 17 伊藤由貴(2015:96)は、助数詞の成立の認定に疑問数を用いる場合、「幾」を用いるか「何」を用いるかといった問題があるとしている。近代語で実際にそ

うであったかを確かめる術はもうないが、確かに、「何（なん）大学」とは言っても「幾大学」とは言わないなどの違いがあるように思われる。しかし、疑問数を付すことができるということが助数詞を切り出す上で有効であるならば、その有用性の検証も兼ねて、疑問数「幾」が付された用例を提示することには意味があると思われる。なお、「-種類」は以下のように「幾」を付すことも可能である。

(iv) 私の考案した体操には幾種類も型があるのであるが今其中の一つをこゝに話してみよう。

(嘉納治五郎「新工夫の席上体操」『女学世界』1909\_10号)

- 18 ルビは「なにしゅるい」であったが、文脈から数量を問題にしていると捉えられるため、「何（なん）」が付加した用例として挙げる。
- 19 一文中に同じ表現が繰り返し用いられた場合、それは冗長と感じられる可能性が高いが、リスト用法については、テキストレベルの問題となり、表現の冗長性よりも表現の統一性が優先されるのだと思われる。
- 20 『聞蔵Ⅱビジュアル』の「朝日新聞」の調査から得られた数詞と結合した「タイプ」の用例 800 例のうち、2つの数量表現が接続して現れているものは 37 例 (4.62%)、内訳は「タイプ」が先行しているもの 17 例、後続しているもの 20 例であった。また、1 例のみ次のような例が見られた。

(v) この開発で、各種機器の小型化がさらに進むとみられるが、入出電力に比べて 9機種2タイプをそろえ、当面年間 10 万個の生産を予定している。

(朝日新聞 1987/3/13)

(v) 以外の用例は後続の要素が総分類数を表すと解釈されるのに対し、(v) のように、先行する要素の数の方が後続の要素の数よりも大きい場合は、「9機種それぞれに対し2つのタイプが存在し、合計で18種類ある」と解釈されるようである。

## 参考文献

- 伊藤由貴 (2015) 「助数詞「機」の成立」『語文』104, pp.99-85 大阪大学国語国文学会
- 影山太郎・眞野美穂・米澤優・當野能之 (2011) 「第1章 名詞の数え方と類別」影山太郎 (編)『日英対照 名詞の意味と構文』pp.10-35 大修館書店
- 金愛蘭 (2011) 「20世紀後半の新聞語彙における外来語の基本語化」『阪大日本語研究 別冊3』大阪大学大学院文学研究科日本語学講座
- 国立国語研究所 (1987)『国立国語研究所報告 89 雑誌用語の変遷』秀英出版
- 小柳智一 (2013) 「言語変化の段階と要因」『学芸国語国文学』45, pp.14-25 東京学芸大学国語国文学会
- 田中佑 (2012) 「日本語助数詞の範囲 一名詞と助数詞の連続性一」『筑波応用言語学研究』19, pp.117-126 筑波大学人文社会科学研究科文芸・言語専攻応用言語学領域
- 田中佑 (2014) 「近現代日本語における新たな助数詞の成立と定着」筑波大学博士論文
- 田中佑 (2015) 「助数詞「-店」の成立の過程と定着の要因」*Ars Linguistica* 22, pp.49-64 日本中部言語学会

- 田中佑 (2016) 「現代日本語における助数詞への外来語の進出 —抽象的概念を表す「-ケース」を例に一」『文藝言語研究』70, pp.81-106 筑波大学大学院人文社会科学科学研究科文芸・言語専攻
- 東条佳奈 (2014) 「名詞型助数詞の類型 —助数詞・準助数詞・疑似助数詞—」『日本語の研究』10-4, pp.16-32 日本語学会
- 橋本和佳 (2010) 『現代日本語における外来語の量的推移に関する研究』ひつじ書房
- 水口志乃扶 (2004) 「日本語の類別詞の特性」西光義弘・水口志乃扶 (編) 『類別詞の対照』 pp.61-77 くろしお出版

### 参考資料

- 『聞蔵Ⅱビジュアル』, 朝日新聞社
- 『近代女性雑誌コーパス』, 国立国語研究所, 2006
- 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』, 国立国語研究所, 2011
- 『神戸大学デジタル版新聞記事文庫』, 神戸大学附属図書館
- 『国民之友コーパス』, 国立国語研究所, 2014
- 『『国会会議録』パッケージ』, 山口昌也, 国立国語研究所, 2014
- 『太陽コーパス』, 国立国語研究所 (編), 博文館新社, 2005
- 『使い方の分かる類語例解辞典 新装版』, 遠藤織枝 (編), 小学館, 2006
- 『明六雑誌コーパス』, 国立国語研究所, 2012